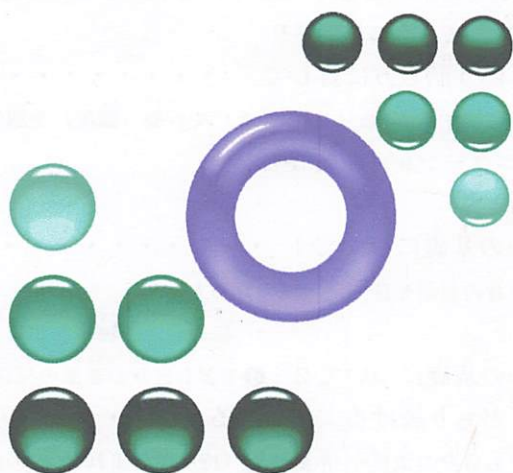


し 知 っ て 得 ず る ？  
き つ お ん は な し  
吃 音 の 話



= 目 = 次 =

はじめに	1
1. コミュニケーションという視点から	2
2. 吃音の今	3
3. 吃音のとらえ方	4
4. どもるとい話し方	5
; ①「どもる」とい発話の流暢性の問題	
1) どもり方(吃音の症状)の3つの基本形と吃音の進展	
2) どもっても楽しくおしゃべり	
5. どもるとい話し方に対して	8
; ②吃音に関する情動(心の動き)や行動(態度)や認知(考え方)	
1) コミュニケーションの姿から	
2) 心の動き方	
6. 話すための基礎について1	12
; ③子ども自身の言語発達(ことばの育ち方)や 認知発達(物事を知る力の育ち方)	
7. 話すための基礎について2; ④子ども自身の運動の発達	15
8. どうしてどもり続けるようになるの?	17
; ⑤子ども自身の気質や情動機能(持って生まれた心の動き方)	
9. までに換えて; ⑥子どもを取り囲む環境	19
1) 子どもをどのように見るか	
2) 吃音はどのように見られているのか	
おわりに	24

## はじめに



人の話し方は、その人の人柄を表すとよく言われます。確かに、話し方は人の表に現れるものですから、つついその人の人柄に思いを巡らせるということをしてしまうものです。早口にまくし立てる人なら、せっかちな人なのだろうか、訥々と話す人なら、考え深い人なのだろうかといった具合にです。とはいえ、百人いれば、百通りの話し方がありますから、早口にといても、訥々といても人それぞれの早口さであり、訥々さであるわけです。



「声紋分析」をご存じでしょうか。犯罪ドラマなどでよく耳にすることばです。話し方の質を分析して犯人を割り出すための科学捜査の一つの方法です。このようなことから話し方がいかに個性的かが分かります。

話し方は個性的である。けれども・・・、というのが、この冊子で取り上げる「吃音」という話し方です。



## 1. コミュニケーションという視点から

「話しことば」は、人と人とお互いに情報を交換し合い、知識を得たり、お互いの理解を深めたり、思いを交わし合ったりなどをするための大切な道具です。その時、何が大切かという点、「意味」です。「何を言っているのか」、「何が求められているのか」、「何をしたらよいのか」などを交わし合います。今、交わし合うと言いました。ということは、対応する表現が必要になります。「何が言いたいのか」、「何を求めたいのか」、「何をしてもらいたいのか」などです。前の表現は【聞き手】の立場に立って、後の表現は【話し手】の立場に立ってのもので、人と人とはお互いに【聞き手】と【話し手】の役割を交代しながら情報を交換し合います。これがコミュニケーションの最も大切なルールです。

一方で、人の耳は、意味にではなく、話し方にこだわる性格もあります。「あの人の話し方って・・・」との思いを抱いたり、口に出したりしたことはありませんか。先に相手の人柄に思いを巡らすということを述べましたが、このことはコミュニケーションの一つの側面に関わっています。と言うのも、人と人が関わる場面では、相手を知らないコミュニケーションがうまく進まないからです。相手を知ろうとする思いも働くわけです。

ところで、もしも、「意味」にではなく、「話し方」をとやかく言われたら、しかも、日常茶飯事に言われたとしたら、どうでしょうか。あなたが話すたびに、「もう少しゆっくり話してくれない」とか、「キンキン声でしゃべるのやめてほしいんだけど」とか、「もごもごしゃべらないで、はっきり話さないよ」とかと言われ続けたら、あなたはその人と話したいと思いませんか。その人が職場の上役で話さなくてはならないとしても、どこかオドオドしながらにはならないでしょうか。話し方を否定的に指摘され続けるということは、大げさに言えば、自分の人格を攻撃されている、あるいは、否定されているという思いを抱かせられるものともなっていくのです。

前触れですが、このような聞き手との関係の中では、吃音のある人や子どもは上に述べたような思いを多かれ少なかれ抱かせられることになり、吃音という話し方の呪縛に絡め取られていくとされています。

私たちのコミュニケーションは、どのような聞き手に巡り会うかによって左右されます。巧みな聞き手に巡り会うと、言わなくてもよいことまでつい話してしまうような経験をしたことはありませんか。おそらくそれは、話の中身に真剣に耳を傾けてくれる聞き手だからこそではないでしょうか。

吃音は単に話し方の問題ではありません。聞き手と話し手との間にある問題でもあるのです。



## 2. 吃音の今

古代ギリシャ時代の文献にも吃音についての記述があるそうです。一説によると、旧約聖書に登場するモーゼも吃音であったとか。それほど古い時代から吃音に関しては取り沙汰されていたのです。おそらく人がことばを話し始めた時から吃音という話し方はあったのではないかと想像されます。

ところで、「吃音」という言葉は耳慣れないものではないでしょうか。以前は「どもり」と言われていましたが、今は使わなくなりました。「どもる」という動詞も、今はあまり耳にしなくなりましたが、こちらは「今、どもっちゃたよ」などと使えます。

話を戻します。古い文献に出てくる「吃音」は、「困った話し方」として述べられています。そして、何とかならないものかと吃音がある登場人物は色々工夫を凝らします。石を口に含んで話してみたり、自分の代わりに誰

かに話させたりなどです。

このように古い時代から取り沙汰されている「吃音」ですが、本格的に科学的な研究が始まったのは1950年代頃からです。

そして、現在、科学技術の進歩と共に様々な角度からの研究が世界中の国でなされています。けれども、残念なことに『吃音が生じる原因は不明』のままです。「吃音」は謎に包まれた話し方というわけです。

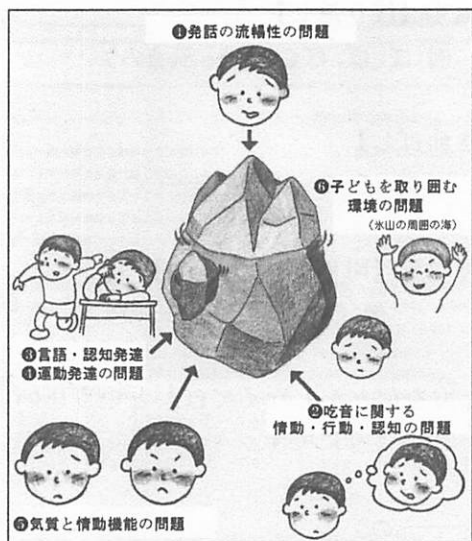


原因不明の、謎に包まれた話し方である「吃音」ですから、『この方法でなら、なおせる』という確実な方法はまだ見つかってはいません。しかし、そうとはいえ、吃音で困っている人をそのまま困らせておくわけにはいきません。幸いなことに、吃音の研究が進む中で様々な方法が工夫され、洗練されてきています。そして、吃音をなおすという意味も様々な視点から問い直されてきています。先に取り上げた「コミュニケーションの視点」もその一つです。



### 3. 吃音のとらえ方

金沢大学の小林宏明先生は、アメリカの吃音研究者シーアンの「吃音を氷山にたとえる説」をよく引き合いに出して吃音を説明されます。それは、「氷山の海面に出ている部分、つまり他の人が見たり、聞いたりできる部分（どもる話し方）は、吃音全体からすると本当にわずかな部分にすぎません。そして、氷山の海面下の非常に大きい部分には、吃音のない人にとって何でもない単純な文章を話すことができない時に感じる、恥ずかしさや恐れ、罪の意識、その他の感情が沈んでいるのです。」というものです。



小林宏明著『字跡児の吃音の指導・支援』改訂第2版 p.3 一部改変

としてあります。この小林先生の考え方が、現在の吃音の基本的なとらえ方です。そこで、次章から①から⑥の領域の内容を具体的に述べながら、支援の仕方を考えていきたいと思っております。

#### 4. どもるといふ話し方；①「どもる」といふ発話の流暢性の問題

どもることは自分の思いどは関わりなく生じる話し方です。吃音のある子どもも大人もどもりたくてどもっているわけでは、決してありません。このことをまず心に深く留めておいてください。

##### 1) どもり方 (吃音の症状) の3つの基本形と吃音の進展

どもり方には、3つの基本的な形があります。それは、

小林先生は左の図のように、氷山の海面上の部分として、①「どもる」といふ発話の流暢性の問題があるとし、海面下の部分、そして、それを「発話の流暢性の根底にある問題」として、②吃音に関する情動 (心の動き)、行動 (態度) や認知 (考え方)、③子ども自身の言語発達 (ことばの育ち方) や認知発達 (物事を知る力の育ち方)、④運動の発達の問題、⑤子ども自身の気質や情動機能 (心の動き方) の問題、⑥子どもを取り囲む環境の問題がある

①ことばの最初の音やいくつかを繰り返す【繰り返す】

例：ぼ、ぼ、ぼく、き、き、き、きのう……。

②ことばの音を伸ばしてしまふ【引き伸ばし】

例：ぼ——く、き——のう……。

③声が詰まって、なかなか出てこなくなる【阻止（ブロック）】

例：ぼつつく、きつつのう……。

この3つのどもり方が、『自分の話し方を何とかしなくては』という思いから組み合わされていきます。例えば、次のようにです。

ぼつつぼつつく、き——のう……。

そしてさらに、「えーとね、えーと、えーと、ぼく、えーと、きのう……。」のように「えーと」などが頻繁に言われたり、声を出すために足を踏みならしたり、のけぞったり、手で体をたたいたりなどの体の動きどが加わったりします。

どもり方が自立つようになればなるほど、  
『何とかしなくては』との思いも強くなり、話す時の緊張や不安などが高まります。他の子がいとも簡単に話しているのに、なぜ自分にはで



きないのだろうとの思いから、自分に対する自信も失われていき、話すことをあきらめてしまうことさえあります。「分かりません」「忘れた」「知らない」「どっちでも」などそれ以上話さなくてもすむような返事が多く聞かれるようになっていきます。



このようにどもるといふ自分の話し方を悪いものと思ひ込み、そこからなかなか抜け出せなくなる状態を『吃音の悪循環』と言います。どもり方は悪化し、それが様々な面に影響を及ぼしま



す。【<sup>きつおん</sup>吃音の<sup>しんてん</sup>進展】です。

このようなことは、なにも<sup>きつおん</sup>吃音に<sup>かぎ</sup>限ったことではありません。あることに<sup>とら</sup>囚われるとそこからどうしても<sup>はな</sup>離れられなくなる<sup>わたし</sup>私たちの<sup>こころ</sup>心の<sup>うご</sup>動き<sup>かた</sup>方のひとつです。

## 2) <sup>たの</sup>ども<sup>も</sup>も<sup>たの</sup>楽しくおしゃべり



「あわてないで。もっとゆっくり<sup>はな</sup>話<sup>し</sup>なさい。」このように<sup>こ</sup>子どもが<sup>ども</sup>ども<sup>と</sup>った<sup>とき</sup>時<sup>につ</sup>いつい<sup>い</sup>言<sup>っ</sup>て<sup>し</sup>ま<sup>う</sup>こ<sup>は</sup>な<sup>い</sup>で<sup>し</sup>よ<sup>う</sup>か。あるいは、「もう一度<sup>い</sup>言<sup>っ</sup>て<sup>ご</sup>ら<sup>ん</sup>。」などと。<sup>はな</sup>話<sup>し</sup>方<sup>に</sup>対<sup>し</sup>て<sup>わ</sup>た<sup>し</sup>ち<sup>は</sup>あ<sup>る</sup>価<sup>値</sup>観<sup>を</sup>知<sup>ら</sup>ず<sup>知</sup>ら<sup>ず</sup>の<sup>う</sup>ち<sup>に</sup>持<sup>た</sup>さ<sup>れ</sup>て<sup>い</sup>ま<sup>す</sup>。『滑<sup>ら</sup>か<sup>に</sup>、は<sup>っ</sup>き<sup>り</sup>と、相<sup>手</sup>に<sup>わ</sup>か<sup>る</sup>よ<sup>う</sup>に<sup>は</sup>な<sup>す</sup>』<sup>こ</sup>を<sup>い</sup>い<sup>と</sup>して<sup>し</sup>ま<sup>う</sup>の<sup>で</sup>す。そして、それ以外<sup>の</sup>話<sup>し</sup>方<sup>で</sup>は<sup>困</sup>ると<sup>おも</sup>い<sup>が</sup>ち<sup>な</sup>の<sup>で</sup>す。

<sup>きつおん</sup>吃音<sup>の</sup>ない<sup>こ</sup>子<sup>に</sup>と<sup>つ</sup>て<sup>こ</sup>の<sup>よ</sup>う<sup>に</sup>話<sup>し</sup>方<sup>を</sup>指<sup>摘</sup>さ<sup>れ</sup>る<sup>こ</sup>は、大<sup>し</sup>た<sup>こ</sup>と<sup>で</sup>は<sup>な</sup>い<sup>で</sup>し<sup>よ</sup>う。<sup>かん</sup>簡<sup>単</sup>に<sup>な</sup>め<sup>ら</sup>か<sup>な</sup>話<sup>し</sup>方<sup>に</sup>変<sup>え</sup>る<sup>こ</sup>が<sup>で</sup>き<sup>る</sup>か<sup>ら</sup>で<sup>す</sup>。けれども、<sup>きつおん</sup>吃音<sup>の</sup>ある<sup>こ</sup>子<sup>に</sup>と<sup>つ</sup>て<sup>は</sup>ど<sup>う</sup>で<sup>し</sup>よ<sup>う</sup>か。無<sup>り</sup>理<sup>難</sup>題<sup>を</sup>投<sup>げ</sup>つ<sup>け</sup>ら<sup>れ</sup>た<sup>こ</sup>に<sup>な</sup>る<sup>か</sup>も<sup>し</sup>れ<sup>ま</sup>せ<sup>ん</sup>。あるいは、『自<sup>分</sup>の<sup>話</sup>し<sup>方</sup>は<sup>や</sup>っ<sup>ぱ</sup>り<sup>駄</sup>目<sup>な</sup>んだ』と<sup>き</sup>づ<sup>く</sup>か<sup>も</sup>し<sup>れ</sup>ま<sup>せ</sup>ん。

ど<sup>の</sup>子<sup>も</sup>、話<sup>し</sup>方<sup>で</sup>は<sup>な</sup>く、今<sup>ま</sup>自<sup>分</sup>が<sup>話</sup>して<sup>い</sup>る<sup>こ</sup>を<sup>を</sup>聞<sup>い</sup>て<sup>ほ</sup>し<sup>い</sup>の<sup>で</sup>す。そして、話<sup>し</sup>方<sup>な</sup>ど<sup>き</sup>に<sup>さ</sup>れ<sup>る</sup>こ<sup>と</sup>な<sup>く</sup>、楽<sup>しく</sup>お<sup>しゃ</sup>べ<sup>り</sup>が<sup>し</sup>た<sup>い</sup>の<sup>で</sup>す。



## 5. どもるといふ話し方に対して

; ②吃音に関する情動（心の動き）や行動（態度）や認知（考え方）

### 1) コミュニケーションの姿から

吃音は、独り言ではほとんど起こらないと言われます。相手（聞き手）がいないからなのでしょう。相手がいると、「そんなふうに言われると、うれしいな。」「この人、ちゃんと分かってくれていた。」「一緒に喜んでくれている。やっぱり話してよかった。」など、心が浮き立ったり、「そんな言い方はないでしょう!」「この人、本当のことを言っているのかしら?」「アタシをばかにしているのよね。」「お世辞に決まってる! うらやましいのね。」など、否定的に心が疼いたりするものです。



ところで、私たちが人と向き合いながら会話を交わす時、「ことば」だけに注意を向けたり、心を動かしたりしているのではないそうです。誰かと話しているところを思い描いてみてください。話している場の雰囲気はそこにはあります。友だちとか、目上とか、初対面の人とかなど相手との関係があります。当然、その相手をどのように思っているかということも関わってきます。楽しいことなのか、悲しいことなのか、頼み事なのか、その断りなのかなど、何についての話なのかということも。そして、その内容に対してどのような口調で、どのようなことばを選んで話すのかということも。おまけに体調ということも関わってきます。元気なのか、疲れているのかなど。

そして、相手の様子や口調から次のことばや話し方を瞬時に選んで返していきます。まだあります。会話が終わった後、心に残るものがあると、それについて思いを巡らせ、次は、こうしようと反省したりもします。

このように考えると、会話を交わすということはあまりにも大変なことに思えますが、普段、私たちはこのようなことを思い悩むことなく、ことばを交わしています。人間のコミュニケーション能力のすごいところです。

「普段は思い悩まないで」と述べました。では、「普段」ではない時はどうでしょうか。例えば、お祝いの席でスピーチを頼まれたとか、言いにくいことをどうしても言わなくてはならない時とかです。このような時には、『相手（聞き手）がどのように受け止めるか』が気になって仕方がないのではないのでしょうか。そして、そのことが無事に済むまで、ああでもない、こうでもないと思いつむのではないのでしょうか。



このような悩みは、話すことに前向きな悩みといえそうですが、吃音のある子の場合、「（話の内容ではなく）話し方そのもの」に悩みを深めるようになっていくことが往々にしてあります。先に、「話し方をとやかく言わないで、話の内容に耳を傾けましょう」と述べました。これは、吃音のある子どもとの接し方の基本的なルールです

ところで、ここに、吃音のある子どもの話に一生懸命、耳を傾けているお父さんがいたとします。口元は笑っているのですが、目は心配そうです。さて、子どもはどのように感じ取るでしょうか。お分かりと思いますが、まさに「目は口ほどにものを言い」です。このことも心に留めておいてください。

親が子どもの話し方を心配する。これは理屈ではなく、親としての心の動きです。良い悪いではありません。こうした方がいい、ああした方がいいと言いたくなるのも親としては当たり前です。けれども、【子どもとしては】がここでは問題となります。親の当たり前が、子どもの悩みとなるような親子の関係が往々にして生まれてしまうことは、経験的にお分かりになると思います。一方的な関係は



悩みを生じさせやすくするというのではないのでしょうか。

そこで、親としての心配を子どもに伝えて、子どもの思いを訊こうということが大切になります。以前、新学期の面談で吃音のある子どものお母さんが、「家では吃音が目立つので・・・」と話されました。「子どもに訊いてみたら」と答えた翌週、「大丈夫、学校ではうまくやってるから、と言われてほっとした」とのことでした。普段から吃音について話ができていることあるのですが、「案じるより話し合い」ということでしょうか。

## 2) 心の動き方

人の心は多彩です。その時その場で様々に変化しています。けれども、八方ふさがりになり、身動きが取れなくなってしまう心の動きが形作られてしまうことがあります。そうすると、Aという状況に対して必ずBという心の動きが生じるようになります。そして、この心の動きは大変個性的なものですから、周りは、「えっ、どうして・・・？」となることもあります。

さて、発吃年齢（吃音が始めて生じる年齢）のピークは2歳から4歳といわれています。丁度、子どもがコミュニケーション能力を高める時期です。2歳というのは、2語文が話されるようになる年齢、4歳は話し言葉の土台ができあがる年齢です。人の人生の中で一番言葉の発達がめざましい時です。ですから、人と話したくて仕方がない時期でもあります。

吃音があろうとなかろうと、この時期の言葉によるコミュニケーションの豊かさ（よく・わたしの話を聴いてくれる人がいて、自分の気持ちに添ってちゃんと答えてくれる）が子どもの言葉の発達の原動力になります。



吃音に対する心の動きは、人とのコミュニケーションによって芽生えます。子どもがどもりながらも、とっても楽しげに話しているのに、聞き手が

どことなく心配そうな表情を目に浮かべていたら、それだけで子どもは『どうしてだろう？』と感じ取ってしまいます。相手の表情を読み取る能力は生まれながらに備わっている、と現在の赤ちゃん研究は言っています。そして、私たちは、特別な事情がない限り、誰もがこの能力をフル回転させて人とコミュニケーションしているのです。

聞き手が親であるならば、『我が子の言葉が順調に育ってほしい』という当然の思いをもっているはずです。ですから、『大丈夫かしら、この話し方？』と思いつつ、子どもの話し方を聞くようになっていくのも自然の成り行きです。子どもの『どうしてだろう？』と親の『大丈夫かしら？』が二人のコミュニケーションの中で続くようになると、子どもは『もしかしたら、ぼく・わたしの話し方が心配させている？』となり、そして、『この話し方を何とかしなくては！』となり、話す時に余計な力が加わっていきます。こうなると、どもり方は目立つようになり、親は『この話し方、大丈夫ではなさそう・・・』となり、心配の度合いが大きくなります。話し方を巡って、親と子の心が暗い渦に巻き込まれていくことになります。

『ぼくの話し方が、お母さんを心配させたり、悲しがらせたりしているんだ。何とかしなくちゃ！』と子どもは思い、足を踏み出して話せば、どもらないで済みそうと工夫をします。随伴



行動といわれる体の動きです。「あか」はどもるので、「レッド」とことを換えて言ったり、分かっているけど、「分からない」と答えたり、どもることを避けたりします。どの行動も『吃音は悪いもの』だから、『どもってはいけない』という思いから引き起こされるものです。

一方、親の方も『私のせいで・・・。何とかしてあげなくては！』との思いを強めます。「ゆっくり話さない。」「あわてないで。」と声掛けしたり、どもる子どもの顔が見られずに目をそらせたり、「後でね。」と子どもから離れていったりしがちになってしまいます。

親も子もそうしたくてそうするのではないはずなのに、そのような振る舞いになってしまふ。吃音という話し方に対するマイナスの思いがなせる仕業なのでしょうか。親と子がお互いを思いやる中でどうしてこのようなことが起こるのでしょうか。吃音研究の大御所 故ヴァン・ライパー博士が、「吃音が悪いのではない。吃音を悪いと思うことが悪いのだ。」と述べられています。博士ご自身吃音がおありでしたので、自戒の意味を込めての言葉なのかも知れません。

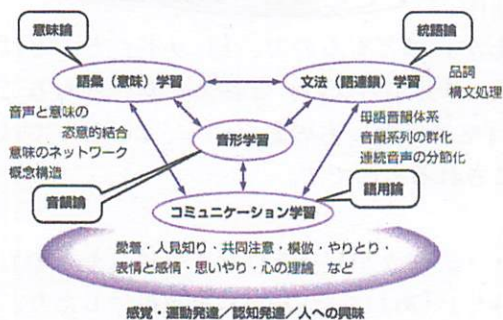
吃音を悪と考えることで、どもること（A）に対して何とかしなくては（B）となり、さらに吃音を悪に染め上げていく。この連鎖をまずは断ち切る努力が必要なのでしょう。



## 6. 話すための基礎について 1

③ 子ども自身の言語発達（ことばの育ち方）や認知発達（物事を知る力の育ち方）

ことばが育つことは、物事を知る方が育つことでもあります。けれども、ことばの育ち方は、一人一人違います。また、一口に「ことばの育ち」と言っても、下図のように様々な領域があるのです。それぞれの領域はそれぞれ



れに関連し合いながら育つのですが、それぞれの育ち方の速さが異なってもいるのです。

例えば、吃音の生じる理由として、ことばを作っている音の並びせ方（図の音韻論の領域）の育ちがゆっくりしている子どもの場合、「あした」

沼田子編『発達期言語コミュニケーション障害の新しい視点と介入論 第9章 障害児の音声知覚と言語発達 林安紀子著』医学書院 2007 p.254

という時、「あ、あ、あ、」と言いながら、次に来る音を探しているから、  
という考え方があります。吃音はこのようなシンプルな理由で生じるので  
はないのでしょうか、このような理由も加わって生じることはありそうで  
す。

私たちが、あることについて話したい時に、そのことがうまく伝わるよ  
うに頭の中のことばの貯蔵庫からことばを選び出します。そして、それを  
ことばの並べ方の規則に従って組み立て、発音すべき音の順序に従って話  
していきます。その時、声には場や相手によって速さや質や口調などの味付  
けを施していきます。しかも、これを、どこかに不具合が生じないのが不  
思議はくらい驚くほど高速な作業でしているのです。

ことばのすべての領域がタイミングよく育ち、スムーズに話せるよう  
になるのが理想的なのですが、幼い内はどこかでちょっとした不具合が当  
り前のように生じます。吃音のある子どもの場合、ことばの領域の育ち方  
のタイミングの合い方が人より時間がかかるのかも知れません。このよう  
に考えると、吃音のある子との普段の接し方が見えてくるのではないでしょ  
うか。

子ども一人一人には、それぞれのことばの育ち方があります。  
身近にいる人がその育ち方を感じ取り、それにふさわしい接し  
方をすることが一番理想的です。とはいえ、誰もがことばの専  
門家ではありませんし、日常の生活の忙しさの中では、これは  
易しいことではありません。ただ次の4つのことを心掛けるこ  
とがとても大切であると思います。



一つ目は、「子どもは、ことば育ての真っ最中」ということを心にしっ  
かり留めておいてください。ことばをスムーズに出せなかったり、おかしな  
言い回しになったりするの、ごく当たり前だということです。にこやかに

応じ、必要なら繰り返して言ってあげたり、適切な言い回しで返してあげたりしてください。子どもがそれを学び取っていきます。

二つ目は、「子どもは自分の話を聞いてほしい」と、一途に思っているということです。良き聞き手がいるということが、実はコミュニケーション能力を育てる秘訣です。そして、良き聞き手とは、ゆったりと子どもと向き合いながら、子どもの思いに応じた相づちを打ち、子どもの未熟な表現に助け船を出し、自分の言いたいことがちゃんと伝えられたと、子どもに満足感と成就感を与える聞き手のことです。

三つ目は、子どもと話す時の速さです。現在は総体的に早口気味ですから、発話速度が速くなりがちです。ことば育ての真っ最中にある子どもにとっては、話を組み立て、それを話すための時間的なゆとりがとても必要なのです。子どもがせかせか話す時には不具合が生じやすくなるものです。ゆっくりめに、間を取りながら話すことによって子どもは話しやすくなります。

四つ目は、簡単な言葉で、簡単な表現でということです。入学式の時に、「立っっ」と号令を掛けられてもきょとんとしている子がいます。「立っっください」なら、さっとう行動に移せます。分かりやすいことばは、理解しやすく、「分かった、できた」という成功感も子どもに与えます。難しい言い回しはその逆の思いを起こさせやすいものです。また、同じように言わなければと無理に背伸びをさせることにもなりかねません。

何かの指示を出す時でも、3つも4つも一時にすると戸惑いが起きやすくなります。「戸棚からコップを出して、冷蔵庫のジュースを容れて、お父さんの所に行って行ってから・・・」このような指示は子どもによっては大きな負担となります。





子どものことばの脊<sup>そだ</sup>ちに応<sup>おう</sup>じたことば遣<sup>づか</sup>いによって子どもは話<sup>はな</sup>しやすくなりまし、何<sup>なに</sup>よりも「できた、やれた」という思<sup>おも</sup>いが子ども<sup>こ</sup>の自<sup>じ</sup>信<sup>しん</sup>を育<sup>そだ</sup>てていきます。



## 7. 話<sup>はな</sup>すための基<sup>き</sup>礎<sup>そ</sup>について 2 ; ④子<sup>こ</sup>ども自<sup>じ</sup>身<sup>しん</sup>の運<sup>うん</sup>動<sup>どう</sup>の発<sup>はつ</sup>達<sup>たつ</sup>

発<sup>きつ</sup>音<sup>おん</sup>と運<sup>うん</sup>動<sup>どう</sup>の発<sup>はつ</sup>達<sup>たつ</sup>の取<sup>と</sup>り合<sup>あ</sup>わせに首<sup>くび</sup>を傾<sup>かし</sup>げる方<sup>ほう</sup>もいらっしゃるのではないでしょう。実<sup>じつ</sup>は、私<sup>わたし</sup>たちの話<sup>はな</sup>す行<sup>こう</sup>為<sup>い</sup>も運<sup>うん</sup>動<sup>どう</sup>の一<sup>ひと</sup>つです。

しかも、高<sup>こう</sup>速<sup>そく</sup>で精<sup>せい</sup>緻<sup>ち</sup>な運<sup>うん</sup>動<sup>どう</sup>の一<sup>ひと</sup>つです。この運<sup>うん</sup>動<sup>どう</sup>が完<sup>かん</sup>成<sup>せい</sup>するのは個<sup>こ</sup>人<sup>じん</sup>差<sup>さ</sup>はありますが、9歳<sup>さい</sup>ぐらいといわれてい



ます。それほど時<sup>じかん</sup>間<sup>かん</sup>を考<sup>わかし</sup>へて、私<sup>わたし</sup>たちはこの話<sup>はな</sup>すという運<sup>うん</sup>動<sup>どう</sup>を身<sup>み</sup>につけてくるのです。ですから、2年<sup>ねん</sup>生<sup>せい</sup>くらいの子<sup>こ</sup>どもが時<sup>とき</sup>々<sup>ざ</sup>呂<sup>ろ</sup>律<sup>れつ</sup>が回<sup>まわ</sup>らない言<sup>い</sup>い方<sup>かた</sup>をしても当<sup>あ</sup>たり前<sup>まえ</sup>なのです。特<sup>とく</sup>に「しかられるかもしれな

い」などラ行<sup>ら</sup>音<sup>おん</sup>が続<sup>つづ</sup>くよな場<sup>ば</sup>合<sup>あい</sup>に舌<sup>した</sup>がもつれることが起<sup>お</sup>こりやすいよう

です。というも、ラ行<sup>ら</sup>の音<sup>おと</sup>は日<sup>に</sup>本<sup>ほん</sup>語<sup>ご</sup>の音<sup>おと</sup>の中<sup>なか</sup>で一<sup>いち</sup>番<sup>ばん</sup>難<sup>むずか</sup>しい運<sup>うん</sup>動<sup>どう</sup>によつて作<sup>つく</sup>り出<sup>だ</sup>されるからです。

大人<sup>おとな</sup>でも早<sup>はや</sup>口<sup>くち</sup>ことばを最<sup>さい</sup>初<sup>しよ</sup>に言<sup>い</sup>う時<sup>とき</sup>などは舌<sup>した</sup>がもつれてしま

ひます。早<sup>はや</sup>口<sup>くち</sup>ことばは舌<sup>した</sup>がもつれやすい音<sup>おん</sup>のつながりを楽し<sup>たの</sup>むもの

ですから、もつれて当<sup>あ</sup>たり前<sup>まえ</sup>。練<sup>れん</sup>習<sup>しゆ</sup>を重<sup>かさ</sup>ねて、素<sup>す</sup>早<sup>はや</sup>く言<sup>い</sup>えるよになつるとな

んとなく誇<sup>ほこ</sup>らしく感<sup>かん</sup>じ

るものです。

話<sup>はな</sup>し始<sup>はじ</sup>めの子<sup>こ</sup>どもはこの早<sup>はや</sup>口<sup>くち</sup>ことばを練<sup>れん</sup>習<sup>しゆ</sup>して

いるのだと思<sup>おも</sup>ってくださ

い。1から話<sup>はな</sup>すという運<sup>うん</sup>動<sup>どう</sup>を勉<sup>べん</sup>強<sup>きやう</sup>しているの

です

から、動<sup>うご</sup>き

がぎこちなくなつても仕<sup>しか</sup>方<sup>かた</sup>がないわけ

です。周<sup>まわ</sup>りの大<sup>おと</sup>人<sup>とな</sup>もそのこ

を知<sup>し</sup>っていますから、こ

の

もたつきを「かわい

いもたつき」と感<sup>かん</sup>じ、和<sup>わ</sup>気<sup>き</sup>藹<sup>あい</sup>々



な雰囲気<sup>あんい き</sup>が会話<sup>かいわ</sup>の場<sup>ば</sup>に生まれる<sup>う</sup>ものです。そして、この和やかな<sup>なご</sup>な雰囲気<sup>あんい き</sup>が子ども<sup>こども</sup>の発話<sup>はつわ</sup>意欲<sup>いよく</sup>を高<sup>たか</sup>めるため<sup>ため</sup>にとっても大切<sup>たいせつ</sup>な役割<sup>やくわり</sup>を果た<sup>は</sup>している<sup>は</sup>のです。

どの運動<sup>うんどう</sup>もそうですが、自ら<sup>みづか</sup>進<sup>すす</sup>んでやり続<sup>つづ</sup>けることで巧み<sup>たく</sup>さを増<sup>ま</sup>していきます。発話<sup>はつわ</sup>運動<sup>うんどう</sup>の場合<sup>ばい</sup>、喜<sup>よろこ</sup>んで聴<sup>き</sup>いてくれて、自分<sup>じぶん</sup>の思<sup>おも</sup>いに沿<sup>そ</sup>った相づち<sup>あいづち</sup>を容<sup>ゆる</sup>れてくれる人<sup>ひと</sup>がいることが何<sup>なに</sup>よりの意欲<sup>いよく</sup>付<sup>つ</sup>けになります。その時<sup>とき</sup>に、自分<sup>じぶん</sup>の未熟<sup>みじく</sup>な話<sup>かた</sup>し方を、「今<sup>いま</sup>はそれでいいんだよ」と和やか<sup>なご</sup>に受け入<sup>う</sup>けてもらえてい<sup>い</sup>るならば、安心<sup>あんしん</sup>して話<sup>はな</sup>し続<sup>つづ</sup>けることができ<sup>い</sup>ます。つまり、発話<sup>はつわ</sup>運動<sup>うんどう</sup>を練習<sup>れんしゅう</sup>できるとい<sup>い</sup>うこと<sup>こと</sup>です。生活<sup>せいかつ</sup>の中<sup>なか</sup>で自然<sup>しぜん</sup>に運動<sup>うんどう</sup>の練習<sup>れんしゅう</sup>がなされる<sup>な</sup>とい<sup>い</sup>うこと<sup>こと</sup>になります。



発話<sup>はつわ</sup>運動<sup>うんどう</sup>の練習<sup>れんしゅう</sup>となること<sup>こと</sup>ば遊び<sup>あそ</sup>びを3つ紹介<sup>しょうかい</sup>しておきま<sup>し</sup>ょう。皆<sup>みな</sup>さんご存<sup>ぞん</sup>じのもの<sup>もの</sup>ばかり<sup>ばかり</sup>です。

① しりとり：音<sup>おと</sup>をしっかりとらえる力<sup>ちから</sup>とそれを声<sup>こえ</sup>に出<sup>だ</sup>す力<sup>ちから</sup>が育<sup>そだ</sup>ちます。

しりとりができるようになるのは、音<sup>おと</sup>を分析<sup>ぶんせき</sup>してとらえる力<sup>ちから</sup>と関連<sup>かんれん</sup>するので、4歳<sup>さい</sup>くらいからです。けれども、楽<sup>たの</sup>しいしりとり絵本<sup>えほん</sup>などを使<sup>つか</sup>えば、4歳<sup>さい</sup>より低<sup>ひく</sup>いどもにも楽<sup>たの</sup>しめます。しりとりは、道<sup>みち</sup>を歩<sup>ある</sup>きながらでも、電車<sup>でんしゃ</sup>の中<sup>なか</sup>でもどこでも楽<sup>たの</sup>しめます。



② さよならさんかく：適切<sup>てきせつ</sup>なこと<sup>こと</sup>ばを選<sup>えら</sup>び出<sup>だ</sup>して声<sup>こえ</sup>に乗<sup>の</sup>せる力<sup>ちから</sup>を育<sup>そだ</sup>てます。

この遊び<sup>あそ</sup>びも子<sup>こ</sup>どもと一緒<sup>いっしょ</sup>に楽<sup>たの</sup>しめるのは、4歳<sup>さい</sup>以上<sup>いじょう</sup>ですが、リズムカ<sup>リズムカ</sup>ルな口調<sup>くちよう</sup>はわらべ歌<sup>うた</sup>風<sup>ふう</sup>なので、赤<sup>あか</sup>ちゃんでも楽<sup>たの</sup>しむことができ<sup>い</sup>ます。楽<sup>たの</sup>しげない言<sup>まわ</sup>い回<sup>まわ</sup>りで、「さよならさんかく、またきてしかく、しかくはどうふ、と

うふはしろい、しろいはゆき、ゆきはつめたい・・・」まさにそこに、お豆腐  
があったり、雪があったりするといいですね。

⑧ わらべ歌・手遊び歌：～しながら、リズムカルに声を出す力を育てます。

「どのおせんべがやけたかな」とか「ずいずいずっころばし」とか「とんとんとんひげじいさん」などは一度はおやりになったことがあるのではない  
ですか。子どもと向き合いながら、笑いながら、楽しむことで声の使い方が  
上達します。



## 8. どうしてどもり続けるようになるの？

；⑤子ども自身の気質や情動機能（持って生まれた心の動き方）

十人十色。人は一人一人違って、それぞれの持ち味があります。  
そして、この持ち味が作り出される時、二つのことが関わるそうです。子ども  
自身とその子どもの生活している環境です。このように書いてしまうと、  
どこなく単純に思えてしまいますが、子どもも環境も数え切れないほどの様々な要素で形作られて  
います。ですから実際には、複雑に絡み合いながら  
お互いが関わり合っているのです。ですから、「どう  
してこうなるの？」と問うてみても、「本当に正しい  
答は見つからない」となります。



吃音にしても、その原因が長年の研究によっても、現在の科学技術を駆使  
してもわからないのは、子どもと環境の色々な要素が複雑に絡み合った末  
に吃音が生じるからと考えられています。「引越したから」「下の子が生  
まれたから」「祖父の看病に追われていたから」「大けがをしたから」「母(父)

が大病を患ったから」「左利きを右利きに直したから」と思い当たる原因をあれこれ捜すことはできますが、それは、たまたま吃音が生じたきっかけになった出来事に過ぎないのでしょうか。というのも、もしそうなら、そのような経験をした子どもはどの子も吃音になってしまうことになるからです。



ただ、このような出来事に対して、吃音を生じさせてしまった子は、他の子より心を数倍動揺させるタイプの子どもなのだろうとは推察されます。ある出来事に対しての心の振幅の程度と質が情動機能とと考えてください。そう考えると、もしかしたら、吃音のある子はある出来事に鋭く反応して、心を大きく動かしてしまうタイプなのではないことになりませんか。そして、もしそうなら、この心の動きに磨きが掛けられるならば、人としての素晴らしい長所になるのではと思うのですが、いかがですか。

おそらく、これまでに述べてきたことで、お気づきの方も多思うのですが、子どもによっては「吃音になりやすい気質」を持って生まれた子もいると言われています。どの子がということはむろん言えませんし、どの気質がということもはっきり言い切ることはできないのが現状です。ただ吃音が話し方に生じることから、言語発達や発話機能に関わる何らかの気質がということになるのだと思われまます。

そこで、発話運動と情動機能との関わりを考えてみましょう。

多数の人の前で話をしなくてはならない時、ドキドキしませんか。何か失策をして上司の前には立っている時は冷や汗ものでは？このような時、普段話しているようには話せなくなるのではないのでしょうか。心の動きに発話運動は影響されるものなのです。

人の心の動きに鋭敏に反応するタイプの子どもの場合、この心の動きの振幅が大きいようだと、言うことを先に述べました。「心配をさせないように

つかえないように話さなくては！」「からかわれたり、笑われたりしないように話さなくては！」と思えば思うほど、話すための筋肉が緊張してしまいます。筋肉が緊張すればするほど、声になかなか出てくれなくなります。要は「どもらず」の思いが「どもらず」ことになるのです。「どもってしまった」ことが失敗になり、一層の緊張が筋肉に走り、さらにどもってしまうことになります。子どもにとってこんな辛いことはないでしょう。



物事に対して心はどのような方向にも動くことができます。そして、その物事に周りがどのような価値を付けているのかによってその方向は決まります。繰り返しになりますが、吃音を悪いものと周りが思っていれば、子どもも同じ思いになってしまうわけです。



## 9. まとめに換えて；⑤子どもを取り囲む環境

子どもを育てるということは、大事業です。親は常に心配や不安につきまわっています。もちろん、かけがえのない喜びももたらしてくれます。「這えば立て、立てば歩めの親心」、子どもが将来に向かって順調に歩むように心を砕くのも親だからこそです。

一方、子どもにも自分を育てる力があります。「親はなくても子は育つ」などということばもありますが、それは、子どもが育つのを助けてくれる誰かがいてはじめて可能です。親を含めてですが、この誰かが子どもを取り囲む環境の一環



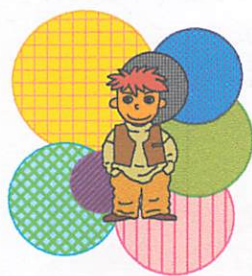
じゅうよう ようそ  
重要な要素です。

個人的に子育ての要は、【転んだら自分の力で起き上がる】子どもを育てることではないかと思っています。そのためになくはならないのが、「自己肯定感」とか「自尊心」とかといわれる「自分は自分でよい」と言える心の土台です。吃音のある子にとってもこの心の土台をしっかりと作ることが最優先課題です。「自分は自分でよい」、この心の土台をつくる手助けとなるのが、ありのままに自分を愛し、認めてくれる環境です。それはとりもなおさず、家庭であるといえるでしょう。

## 1) 子どもをどのように見るか



子どもは生まれた時から、たぶんきつと母親のお腹の中にいる時から、一人一人個性的です。そして、その個性を読み取りながら子育ては進んでいきます。そこに、社会の価値観や親や家族の価値観が加わります。子育てというのは、道に迷っているようなものです。ですから、正しいと選んだ道を進んでいても思わぬ場所に出たりします。親としての自分に向き合い、子どもに向き合いながら迷い迷いするのが子育てです。



親もそうですが、子どもの個性は様々です。左の図のように長所と短所が入り交じっています。もし子どもの短所(親として気になる所)に親の心が囚われてしまうと右の図のようになってしまいます。当然子どもも同じように囚われていきます。それが吃音であるならば、吃音を「悪いもの」にしていま

す。つまり、吃音が悪循環し始めるということになります。親として『気になる』のは致し方ないことです。ただ

「気にし過ぎる」ようになる前に方向転換をしたいものです。方向転換の先



は子どもの長所にです。と、口で言うのは簡単なのですが、親にとってはそれなりの努力があります。

吃音に関わる場面でのいくつかの例を述べておきましょう。

① 子どもがつかえつつかえしながらも話しているならば、それは聞いてほしいことが沢山あるからです。「親としての）私に聞いてほしいのだ！」ということです。幸せなことではありませんか。たとえ多少聞きづらさがあるろうと、子どもの心が聞き手（親）にしっかり向かっているということです。この心をしっかりキャッチしない手があるでしょうか。

② 道で知り合いの人に子どもがつかえながらも挨拶をしました。もしかしたら、親の顔の表情は一瞬こわばるかもしれませんね。『何を言われるかしら』。でも子どもは普段言われていることをきちんと実行したのです。親子の良い関係があるからです。その場で「上手に言えたね」とにこやかに褒めてあげられますか。そして、その笑顔を相手の人にも向けられますか。

③ 子どもが自分の話し方に悲しさや辛さを感じる時があります。そして、甘えてくる時が。「親だからこそ」甘えてくるのです。理屈抜きに分かってほしいのです。まさに子どもを丸ごと抱きしめられる瞬間では？

愛され、ありのままに自分を認められた子どもはたくましく成長するものです。

## 2) 吃音はどのように見られているのか

吃音について正しく知ることは、子どもが安心して話せる（どもれる）環境を整えるための前提です。家族みんながまず吃音について学び、その知識を吃音のある子どもに関わる人に伝えてほしいと思います。



## ① 訳が分からないもの

「どうしてこんな風に話してしまうのか、訳が分からなくて怖かった。」  
吃音のある方が子ども時代を振り返って語った言葉です。長年に渡って吃音の研究は進められていますが、吃音の原因はまだ突き止められていないのが現状です。ですから、答は「なぜどもってしまうのか訳が分からない」なのです。訳が分からないものだから、色々な思いが湧き起こり、それを訳としてこじつけてしまいやすいのです。そして、その行き着く所は親も子どもも「自分のせいで」となりがちです。しかし、ほとんどの吃音の研究者は、「まだ確かな原因は突き止められていないが、親のせいでも、子どものせいでもないことだけは確かである。」とはっきり言っています。



世界中で研究がされているけれど、なぜどもるようになってしまうのかその確かなことはまだ分かっていない。確かなことは、吃音が生じるのは誰のせいでもないということだ。このことは、子どもも親も心にしっかり留めてください。

## ② 吃音には波がある

どもっている。あれ、スラスラ話している。子どもの吃音は千変万化します。時間によって、その日によって、週毎に……。このことから、吃音には波があるといわれます。吃音の不思議さです。

なぜだかも分かっていません。けれども、このようなことが起こるので、親の心も子どもの心も右往左往させられてしまいます。



この波は子どもによって異なります。あるお母さんがこの波のことを「子どもの心と体の状態のバロメーター」と言われました。そして、その時その時の状態によって子どもへの接し方を工夫できたと語られています。子ども自身も同様です。自分の吃音の波を知っておくことは、吃音に動揺させ



られないことにつながります。

### ③ 吃音は隠されがち

強いことばで言うと、吃音は隠蔽工作されやすいということです。この背景には「吃音を悪いもの」とする価値観が働いています。別な言い方をすると、「スラスラ話せるのが普通」という思い込みがあるということです。子どもがどもった時、目が逸れたりしてしまったり、子どもが自分の話し方について尋ねてきた時に、「その話は後でね」と逃げてしまったりなどの姿にそれが現れます。また、「ゆっくり話さない」などの助言？も裏を返せば、子どもの吃音を隠そうとする心の動きかもしれません。子どもも同様に、どもりやすい言葉をどもりにくい言葉に置き換えたりなどします。自分がどもるのを人に見せないためです。

親も子どもも吃音の隠蔽工作に腐心している間は、吃音は悪化していきます。吃音に正しく向き合えないからです。

吃音は親子で語り合えるものです。何事もオープンに語り合えることが親子の信頼関係の最たるものです。むろん、子どもがある年齢に達すると、何事もとは言えなくなりますが。

「オープンに語り合う」ためには、今その時の心の動きをありのままに受け入れることが大切です。良いとか悪いとかの価値付けは一切不要ということです。そして、「ちょっぴり不便で、時々困らせられることもある話しかたかも知れないけれど、言いたいことは言えてるし、友だちとも楽しく遊べているし、やりたいことはやっているし、まあ、じょうずに付き合っていくか」こんな心に親子がなれるように語り合ってほしいと思います。



## おわりに

吃音<sup>きつおん</sup>を金沢大学<sup>かなざわだいがく</sup>の小林宏明先生<sup>こばやしひろあきせんせい</sup>の考<sup>かんが</sup>え方<sup>かた</sup>に沿<sup>そ</sup>いながらコミュニケーションの視<sup>し</sup>点<sup>てん</sup>で述<sup>し</sup>べてきました。おわりは、詩人<sup>しじん</sup>くどうなおこさんの次<sup>つぎ</sup>の詩<sup>し</sup>で締めくくろうと思<sup>おも</sup>います。

ぼくは ぼく

からすえいぞう

ときどき ぼくは

ほんのすこし

いろつきの はねが ほしいなと

おもったりする

ほんのすこし

いいこえで うたえたらなと

おもったりもする

でも

これが ぼくだと

とんでいく

くどうなおこ『のはらうたⅣ』

『知って得する？ 吃音の話』

2016年作成

文責：中村勝則



LIBRARY OF THE  
UNIVERSITY OF  
TORONTO